

【使徒書日課】テモテへの手紙一 6章1～12節

¹軛の下にある奴隷の身分の人は皆、自分の主人を十分尊敬すべきものと考えなければなりません。それは、神の御名とわたしたちの教えが冒瀆されないようにするためです。²主人が信者である場合は、自分の信仰上の兄弟であるからといって軽んぜず、むしろ、いっそう熱心に仕えるべきです。その奉仕から益を受ける主人は信者であり、神に愛されている者だからです。

これらのことを教え、勧めなさい。

³異なる教えを説き、わたしたちの主イエス・キリストの健全な言葉にも、信心に基づく教えにも従わない者がいれば、⁴その者は高慢で、何も分からず、議論や口論に病みつきになっています。そこから、ねたみ、争い、中傷、邪推、⁵絶え間ない言い争いが生じるのです。これらは、精神が腐り、真理に背を向け、信心を利得の道と考える者の間で起こるものです。⁶もっとも、信心は、満ち足りることを知る者には、大きな利得の道です。⁷なぜならば、わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないからです。⁸食べる物と着る物があれば、わたしたちはそれで満足すべきです。⁹金持ちになるろうとする者は、誘惑、畏、無分別で有害なさまざまの欲望に陥ります。その欲望が、人を滅亡と破滅に陥れます。¹⁰金銭の欲は、すべての悪の根です。金銭を追い求めるうちに信仰から迷い出て、さまざまのひどい苦しみで突き刺された者もいます。

¹¹しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい。正義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。¹²信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。命を得るために、あなたは神から召され、多くの証人の前で立派に信仰を表明したのです。

【福音書日課】ルカによる福音書 16章1～13節

¹イエスは、弟子たちにも次のように言われた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄遣いしていると、告げ口をする者があった。²そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』³管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。⁴そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』⁵そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言

った。⁶『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』⁷また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』⁸主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。⁹そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。¹⁰ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。¹¹だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せらるうか。¹²また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるらうか。¹³どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方を親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

「友達を作りなさい」【こども説教のために】

主イエスは、今日、「不正な管理人のたとえ」をお語りになって、わたしたちに「**友達を作りなさい**」とお教えます。「**友達を大切に**しなさい」というのではなく、「**友達を作りなさい**」とおっしゃるのです。

わたしは今日、教会に招かれてきた皆さんにお勧めしましょう、「今日、一人、友達を新しく作って、帰りましょう」と。難しいことはありません。今まで「友達」と言えるような仲ではなかった一人に、声をかけ、挨拶をして、互いに名乗り合えばよいのです。礼拝が終わったら、だれと新しく「友達」になったらよいか、周りを見渡してみましょう。初めて見かける人に声をかけるのは、勇気がいるかもしれません。その人が今日初めて教会に来た人だったら、なおさらです。ならば、まだ名前を知らないけれども、今までに見かけたことのある人に、まず声をかけてみたらどうでしょうか。

主イエスは、食事の席に「徴税人や罪人」を連れて来て、楽しく飲み食いし、親しく語り合われたので、人から「見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間（＝友達）だ」（ルカ 7:34）と、非難されました。「徴税人や罪人」とは「友達」になってはいけなと、だれもが考えていたからです。

主イエスは、そのような人たちを食事に誘い、「友達」になろうとされました。そうするのが「神の国の食事」の作法だと、教えられました。「友達でなかった者が友達になり、交わりに加えられる」ことを、「天の父」がお喜びになられると信じて、そうなさったのです。

無駄遣いしている！

「不正な管理人のたとえ」を、主イエスは、やはり安息日の食事の席でお語りになられたのです。先主日の礼拝で聞いた「放蕩息子のたとえ」（ルカ 15:11~32）に続いて、これをお語りになりました。その直前には、「見失った羊のたとえ」（同 15:4~7）と「無くした銀貨のたとえ」（同 15:8~10）が語られていました。これらは皆、食事の最中、主イエスがお連れになっていた徴税人や罪人が皆、話を聞こうとして…近寄って来た（同 15:1）ときに、語られたたとえです。「放蕩息子のたとえ」までの三つのたとえはファリサイ派の人々や律法学者に向かって、今日の「不正な管理人のたとえ」は弟子たちに向かって、お語りになられたといえます。

これら一連のたとえを聞いていた人たちの中には、主イエスのことをあざ笑う者があったようです（同 16:14）。その人たちは、金に執着する者たちだったというのですが、たとえの意味が分からなかったのでしょうか。

確かに、わたしたちは、主イエスのたとえを聞かされる時、どこか戸惑いを覚えるのです。これが「神の国」のたとえであり、主イエスが信じられた「天の父」の御心を教えるものだと言われても、どこか、引っかかるのです。わずかなものを喪失したからと言って、多大な労力をかけてそれを取り戻し、しかも友達や近所の者呼び集めて祝いまでするような者は、滅多にいません。いくら親バカだからといって、生前贈与してやった相続財産を全部無駄遣いしてしまった息子を、何もなかったかのように家に迎え入れる父親は、どうかしています。財産管理を任されていた者が、無駄遣いをして損失を出しているのに、さらに不正処理をして取引先に恩を売って、自分の身を守ろうとすることが、どうして褒められるのでしょうか。

「親心とは、そういうものだ」という感覚は、わたしにも分かります。我が家の三人の子らも皆、成人しましたが、ときに「どうして、せっかく与えられた恵みを無駄に浪費してしまうのか」と呆れながら、それでも可能な限りは手を差し伸べ続けるしかないのだろうと思い至らされるのです。

それだけでは腑に落ちず、主イエスのご自身をたとえの登場人物の誰に当てはめてお考えだったのだろうか、わたしは思い巡らします。「羊飼い」や「銀貨の持ち主」、「二人の息子の父親」や「金持ちの主人」でしょうか。確かに、そうお考えだったに違いありません。でも、そう思い至るまでには、別のお考えもあったのではないかと思うのです。「ただ一匹、見失われた羊」や「無くした一枚の銀貨」、「放蕩の限りを尽くした弟息子」や「無駄遣いし尽くした管理人」をご自分のこととしてお考えになられたこともあったのではないのでしょうか。あるいは、「家にとどまり続けた兄息子」や「管理人に告げ口をした者」だと考えられたことも、あったのではないのでしょうか。

何も持たずに世に生まれ…

使徒パウロは、「わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持っていくことができない」と言います。だから、彼は、わたしたちが神を信じる者として「満ち足りることを知る者」であるべきだと、考えるのです。地上に生まれ出てきたとき、何も持たずにいた者に、神は命を与えてくださり、母や家族を与えてくださり、日々の糧を与えてくださり、生きる道を与えてくださり、すべてを恵みとして与えてくださる、地上に生きる限りは。

パウロがそのような信仰の確信を貫くことができたのは、彼の人生が苦労の連続だったからではないと思います。むしろ彼は、恵まれた人生を歩んできた人だったと、わたしは思います。彼は、タルソスという町に根を下ろしたディアスポラのユダヤ人の家に生まれました。おそらく裕福な家庭だったのででしょう。彼は、青年時代にラビの学校に学ぶことも許されています。彼には、彼自身が努力したり、お返しをしたりしなくても、常に支えてくれる人々が周囲にいたのです。家族に恵まれ、回心して教会のメンバーになり、宣教活動に携わるようになってからも、彼にはいつも、支えてくれる仲間の人々がいたのです。「友達」がいたし、新たに作られてもいたのです。だからこそ、彼は安心して、「満ち足りることを知る」ことができたのででしょう。そのように心定めて生きていくことができたのででしょう。

わたしは、主イエスも、パウロと同じようなところがあったのではないかと思います。主イエスも、家族に恵まれました。「ルカによる福音書」は、主イエスが十二歳のとき、両親と過越祭を祝うためにエルサレムに上った逸話を伝えています（ルカ 2:41~51）。主イエスは、祭りが終わった後、巡礼団の一行から離れて勝手な行動をし、両親を心配させましたが、罰せられるようなことはありませんでした。およそ三十歳で洗礼者ヨハネから洗礼を受け、宣教活動を始められてからも、母マリアや弟たちを心配させましたが、彼らは息子であり兄である主イエスの活動を「友」として支え続けたのです。

そのような関りを持ち続け、互いに支え合う交わりの中に生かされるのが、どれほど貴いことか。そのような関りを絶たれ、交わりの外に置かれてしまっている人が、たとえ多くの富を持っていたとしても、どれほどみじめなことか。神が望まれているのがどちらなのかは、火を見るより明らかでしょう。天地のすべてを造られた神は、わたしたち皆が、交わりの中で恵みに満ちた人生を生きることをお望みなのです。満ち足りることをお望みなのです。そのためにお与えくださった恵みを、たとえ無駄遣いするような用い方をしたとしても、それによって少しでも交わりの中で満ち足りることを知るようになる者があるならば、神はおほめくださることでしょ